

三仏寺伝来の蔵王権現像

一 軀

木造彩色

平安時代後期

鳥取・観照院蔵

鳥取県岩美町牧谷村の金峰神社の神宮寺である龍王寺が、明治初年の神仏分離の際に廃された。本尊蔵王権現像は、一時観照院(同町岩本)に預け置かれ、その後新たに創建された吉祥院(同町浦富)の本尊となったのだが、観照院側ではこの像に対する「追慕ノ念」止みがたく、明治十二年、三徳山三仏寺に客仏としてあつた別の像を請い受けたという。^①ここに取り挙げるのは、後者の像である。

*

炎髪^②の頂からの像高が六二・三cmという、どちらかといえば小像である。その像容をやや細かく見ていこう。

頭頂に宝髻^③を結び、天冠台を被り、その宝髻の前と天冠台の前寄り左右の三か所から炎髪が出る。三眼で瞋目、上歯列で下唇を噛み、牙上出。上半身は裸形の上に条帛を巻き、下半身には裙、腰布、さらに獸皮をまとう。両肩から天衣を懸ける。臂釧、腕釧、足釧(いずれも彩色であらわす)を付ける。右手を振り挙げて三鈷杵(後補)を執り、左は脇腹辺で第二・三指を竖てる剣印とする。右足を大きく蹴り挙げて膝を曲げ、左足は伸ばして岩座の上に踏ん張る。岩座は褶曲する山岳を思わせ、数個の岩石の組合せという通例とは異なる。

その下は、隅足付きの框座。

ヒノキ材。本体は木心を像背に逃した、目のよく通る材の一木造。内削りはない。一見したところ欠失箇所がなく、良好な保存状態のようであるが、国米泰石による文化財としての修理^④を受けており、施工の精巧なせいもあり、厳密にはその判別の難しい箇所もある。今、分かる範囲で別材矧ぎと後補と思われる部分を記述すると、まず当初から別材を矧いでいた箇所として、両手に接してそこから垂下する天衣遊離部があるが、ここは当初の部分がよく残っている。

またもとから別材矧ぎかどうかは不明であるものの、天衣の頂部(宝髻の両側回り)、同じく右上膊部に接する回り、同じく左方先端の翻えり部、右上上膊部より先、左手第二・三指などはいずれも後補(おそらく国米の)と推測される。持物は後補。補修部分を差し引けば、別材矧ぎの箇所が思いのほか少ない。左手の大部分とそこから舞い上る天衣、蹴り挙げる右足のすべて、あるいは裙裾の翻えりなどまでが本体と共木であり、さらに内削りのないことをも考えると、かなり純粹な一木造の構造を目指したようである。岩座は横木一材製。框座は前後二材矧ぎで、隅足は各一材製。

天冠台上の地髪部正面に竹釘が打たれている。『法華験記』第九十三話^⑤にあるように龍をあらわすものかも知れないが、ほかの現存遺品によればこの部分は三鈷、髑髏形などと、必ずしも一致しない。また右方の上出牙を欠失する。

全体を白色下地彩色とする。肉身部は群青彩。頭髮は黒色の上に截金の毛筋をあらわすものとみられ、白目、齒は白色である。天衣の表は白色(朱描の文様がある)、縁を墨線、裏は白緑、縁を朱線。条帛の表は黄色(朱描の文様がある)、裏は白緑。裙の表は不明ながら、

その縁は連円文(または亀甲つなぎか。色不明)、裏は白地に朱色の花文。腰布の表は不明、裏は白地に朱の網目文で、縁を墨線。獣皮は朱色地に墨描の木葉型を散して豹皮をあらわし、縁に近い部分に金泥を掃く。臂釧、腕釧、足釧の彩色は不明。

岩座には白緑と黄土の具色を交互に塗り分け、その上にベンガラで下草を描く。框座の天板は緑青彩、側面は、隅に緑青・朱・緑青の各三弁花を重ね、中央部分は、中に墨の帯(その中に白色の三連点を繰り返す)を設け、その上下に中寄りからベンガラ・朱・白の縹緗の帯とする。隅足の側面は、墨地に白の三連点を上方に描き、その左右と下方に、やはりベンガラ・朱・白の縹緗帯を付ける。

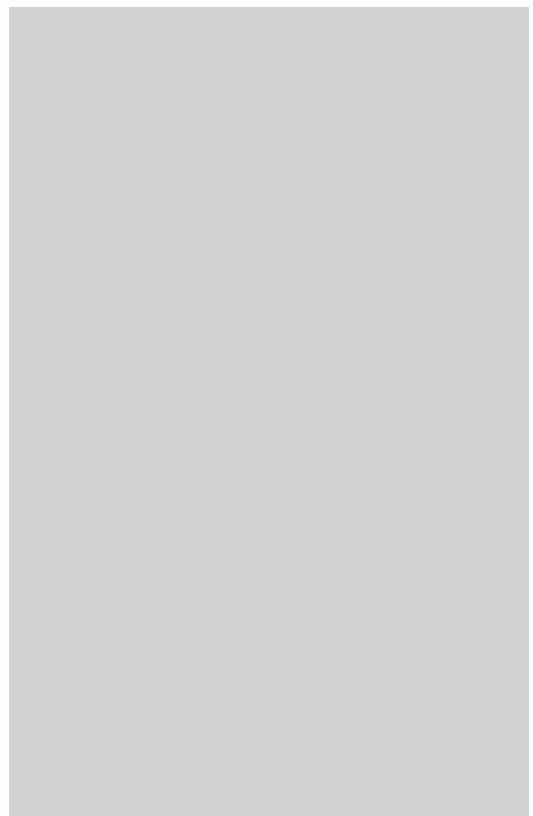
*

ほかの同じ尊像の作例と比べても、岩中から涌出したという躍動感をこれほど実感を伴って表現した例はないだろう。天衣や裾の翻えりだけでなく、前屈みの体勢、斜め下を向く顔面などがその感を助長していることは確かだが、さらに、右足の蹴り挙げがどの像よりも強い。三仏寺投入堂本尊像(仁安三年・一一六八 挿図1)は、天衣や裾裾の翻えりが欠失するとはいえ、前屈みとならずに直立し、顔も真正面を向くという違いがあり、結果的には、観照院像の激しい跳躍に対して、投入堂像は緩い舞踏のような動きにまとめられている。この違いは、後者が一堂の本尊であることによるところが大きいのだろうが、より本質的には、前者が、現実的・具体的な表現への傾斜の始まる時代の所産だということによる。

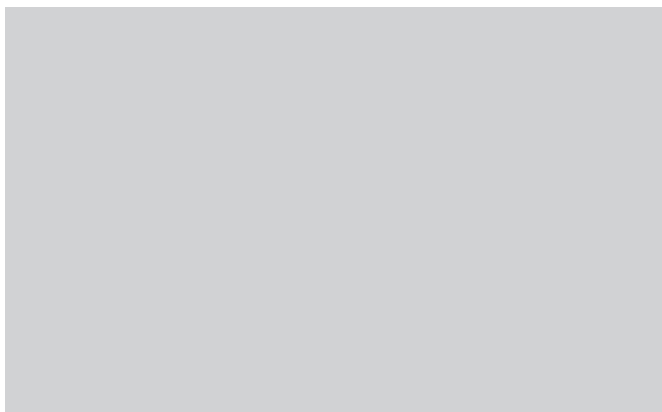
穏やかな彫りながら、細身の体格と動きのある体勢という造形的特徴は、京都でいえば、十二世紀後半、後白河院政期に漸く現われてくる現象で、本像もそのような時期(十二世紀末に近い頃)の作

とみなすことができよう。さらにいえば、本像と違って寄木造・堅地仕上げの例ではあるが、整ったプロポーション、的確で品のある忿怒相などの点で、安元二一三年(一一七六―七七)明円作の大覚寺五大明王像、なかでも軍荼利明王像(挿図2)の姿を思わせることは事実である。作者の同定まではさて置き、少なくとも京都の仏師作が想定できよう。

うねりの多い岩座(挿図3)は、単独の岩石というより、一個の山波を連想させる。下草の描写もそのことを示している。一般によく見られる岩座は、立石と横石の組合せからなる岩盤なのだが、ここでは、蔵王権現涌出の古説に従った山岳となっているのである。大覚寺軍荼利像の岩座(挿図4)が、海上に屹立する岩石の風を示すのに対し、本岩座は金峰山の山容をあらわしている。同じ岩座でも、本来の姿によって表現し分けるのは、後白河院政期らしい現実性への興味の反映である。



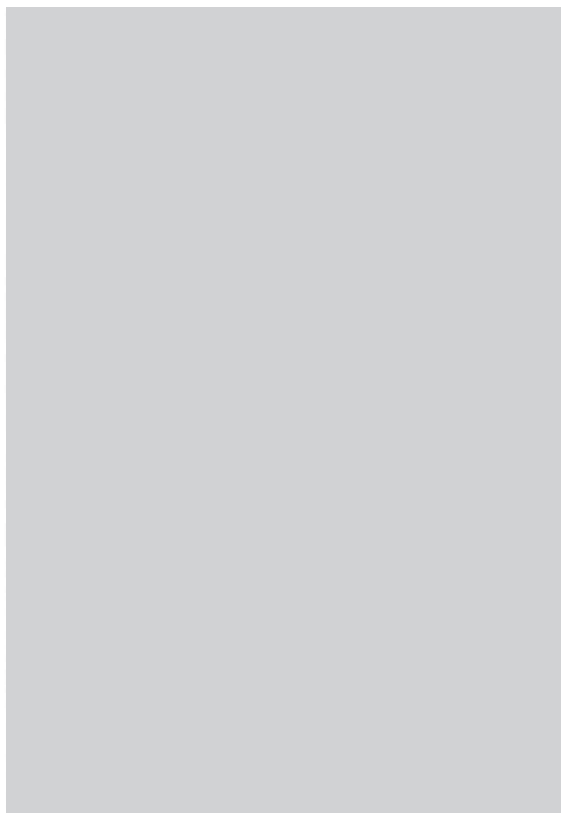
挿図1 蔵王権現像 三仏寺



挿図3 岩座 観照院



挿図4 岩座（軍荼利明王像所用） 大覚寺



挿図2 軍荼利明王像 大覚寺

*

蔵王権現像の遺品は決して少なくはないものの、これほど保存状態の良い例は稀である。彩色はもとより、天衣や裙の翻えり、台座各部までほとんど残っていることからするに、永らく秘仏だったものと推察される。現に観照院には、明治に同院に移されてから新造された素木の厨子が伝えられている。それ以前からも厨子入りだったのだろう。山岳寺院に祀られることの多いせいか、必ずしも状態のよいものが多いとはいえないこの尊像の遺例中、十二世紀末の京都仏師の製作が推定できる一美作として、資料的価値は高い。

本像が観照院へ移座される前、三仏寺内のどこにあったかについて確証はないが、投入堂伝来という推測が一部に行われることがある。しかし投入堂内に造り付けの低い基壇の上には、本尊蔵王権現像のほか、のちに施入された同じ尊像が六体もびっしりと置かれていたのであり、もう一体、しかも厨子入りが想定される像を入れる余裕はほとんどない。移座の顛末について記す『寺院所有明細帳』に、「三徳山三仏寺ニ客仏トシテ有シヲ…」とあり、投入堂安置とは書かれていないことから推測するに、明治初年に廃絶となった坊の像が「客仏」として寺内に置かれていたとみる方が、可能性は高いだろう。保存状態の良さも、里坊安置を推測せしめる。

（伊東史朗）

法量（単位センチメートル）

像高 （炎髪頂から）	六二・三	髮際高	五一・一
頂一顎	一五・九	面長	六・七
面幅	五・八	面奥	七・七
胸厚（右）	八・二	腹厚	九・八
右足柄長	四・九	岩座高	一三・四
（同右）幅	二・二	（同右）幅	二八・九
（同右）奥行	六・四	（同右）奥行	二〇・一
框座高	二・四	隅足高	一・六
（同右）幅	四〇・六	（同右）幅	五・九
（同右）奥行	三二・七	（同右）奥行	四・六

〈注〉

- 1 岩美町文化財保護委員会「岩本村観照院に伝来する蔵王権現像について」（『鳥取県博物館協会会報』一八 昭和五十三年）
なおここには、寺蔵の『寺院所有明細帳』から次のような引用をしている。

明治十年四月神仏判然ノ御趣意ニ依リ、牧谷村龍王寺本尊蔵王菩薩立像ヲ本院ヘ引取り、示後浦留村ヘ吉祥院建立、明治十二年十月該本尊吉祥院ヘ遷仏之際、信徒ノ輩法印良諶ヲ以テ本寺大雲院ヘ該尊追慕ノ念難止ヲ知り、依テ大雲院智光阿闍梨三徳山三仏寺ニ客仏トシテ有シヲ紹介、富本堂内ニ勸請セララル

- 2 国米泰石（明治十二年―昭和三十三年）は、日本美術院創設以来、そこで国宝彫刻の修理にたずさわり、大正十四年に退職してからも引き続き嘱託として修復作業に従事した。本像修理の時期は寺に資料が残されていないので不明だが、昭和七年、鳥取県大山寺ほか五カ寺の国宝修理をした頃か、あるいは戦後、東京国立博物館に本像が寄託されていた時期かが、可能性として考えられる。

- 3 「金峰山の転乗法師」の説話中、「蔵王大菩薩」とおぼしきものが、「竜

の冠したる夜叉の形の人あり。天衣・瓔珞にて厳しく身を飾りて、手に金剛杵を執り、足に華薬を踏みて、……という姿だったことを記している。

- 4 『伯耆民談記』に、三仏寺には「坊院十二舎を置き」とあり、『因府年表』『鳥府厳秘録』には、坊として法明院、浄徳院、遍照院、龍成（城）院、妙法院、長寿院を挙げている（徳永職男「三徳山の歴史と信仰」『山岳宗教史研究叢書』二二 名著出版 昭和五十四年）。のち、法明院が輪光院に、遍照院が正善院に、龍成院が皆成院にそれぞれ改称されて、現在ではこの三院だけが残る。

〔付記〕

観照院像の調査に際しては、鳥取県立博物館小山勝之進氏の協力を得た。